

甲虫勉強会報告

森を育てる会ではカブトムシの森（以下カブ森）を保全目標「里山に代表される二次林の自然環境を復元する作業を行いその象徴として、カブトムシなどの甲虫類が生息・観察できる森」にむけ活動しています。カブ森造成 10年余の今、どんな甲虫がどれくらいいるの？どんな保全をすれば目標の森に近づくの？と考えたく、油山を長くフィールドとしておられる紙谷聡志先生を甲虫の代弁者としてお迎えし、甲虫の視点から森の今を語って頂きました。
《報告/世話役 柴戸慶子》

【内容】

1. カブ森のいま-森会5年夏ペットボトルトラップ調査、他調査より-(座学)

森会の今年の調査では新たに複数の甲虫を確認できた。カブ森には 70 種ほどの甲虫がいる。スギ林を伐採してこの森を造成して 15 年余、みなさんの努力も反映され甲虫にとってそこそこいい森になっている。継続的な調査は森の現況把握に必要。

同じ昆虫でも幼虫と成虫、甲虫でも種類によって利用するエサとすみかは異なる。たとえば多くの甲虫の幼虫は伐採木を利用するが、切りたての木、すこしやわらくなったもの、ボロボロのものなど種によって異なる状態を利用する。カブトムシのオスの成虫は大きめのものは森の狭い範囲を利用し小さめのものは森の広い範囲を利用する。他所で 1 km 移動の報告もある。

他の生物同様甲虫も地域ごとに固有な遺伝子をもっている。飼育しているものを森に放すのは遺伝子のもつ長い歴史をこわすことになる。

2. ツアー「甲虫の一生の身になってカブトムシの森を見る」(フィールドワーク)

鎌田さんのガイドのもと、カブ森で今年特に甲虫が多くかかったトラップ、甲虫に利用してもらおうと整えている材の置き場やヤード、大きく生長し樹液の出るようになったクヌギ、間伐材で作った土留めなどを先生の解説を伺いながら見ていった。

このツアーで紙谷先生から指摘を受け最も話題になったのが、森のキノコに代表される白色腐朽菌がみられる材の置き場が少ないこと。カブトムシの幼虫は堆肥でなくそれに含まれる白色腐朽菌を食べている。昆虫の幼虫を探すと



きには先生は土や枝に白っぽい菌があるところを探すがそのような場所が少ない。つまりカブトムシの幼虫のエサが少ないということ。白色腐朽菌を増やすには、森の中にあるそれらの菌をヤードにいれることなどで可能。また基本的に甲虫が利用できるさまざまな段階の枯れた材が少ないという指摘を受けた。

3. 「これからのカブ森を考える 甲虫の視点 人の視点」(ワークショップ)

以下2点のお題でカブ森のこれからについて考えた。

お題1「(甲虫である私はここで)このような管理をしてほしい」

すっかり甲虫になった一同から以下のような要望が出てきた。

- ・ 幼虫のエサ：白色腐朽菌が多くなる管理をしてほしい。
- ・ 幼虫のエサ：切りたての木からボロボロの木まで様々な段階の材を積んでほしい。
- ・ 人から甲虫を守る：クヌギの根元が掘られているが、傍に甲虫の隠れ家がほしい。



お題2「(私は甲虫の観察できるカブ森を) こう利用したい、しよう」

カブ森にはたくさんの関係者がいて利用について様々な思いがある。お題1の森ができてから、どう利用したいと思っているの?とこの機会に1人の視点で参加者みんなの利用への思い「プチたな卸し」を試み以下のような意見が示された。

- ・ 幅広い市民の利用： 観察資源としての活用、散歩などの利用
- ・ 森会の活動を深める： よりよい管理作業をすすめるなど
- ・ 森会の活動を広める： 市民に森会の活動や緑地保全活動をPR、仲間を増やす

以上3点に比べ昆虫については赤裸々な様々な思いが示された。そのまま書くと・・・

- ・ 昆虫について： 「年に1回もちかえりイベントしたい」「虫をみたい」「虫を放したい」「虫をとりたい」「夏場の捕虫を減らしたい」

紙谷先生からは観察はセンターにまかせるのみならず、保全をする会だからできる観察会もあるのではないか、というアドバイスもいただいた。

講座をおえて

紙谷先生には当日に至る夏の調査のご相談、同定、データ整理など本当にお世話になりました。またオリジナルの「カブ森在住昆虫写真」などさまざまな資料ご提供いただきました。厚くお礼申し上げます。

今回利用への思い「たな卸し」の場を設けましたが、今後利用、保全、そして調査データに基づく科学が一体となった利用に関する「すりあわせ」があると森会、センター、行政、市民など関係一同にとって、自然観察の森の目的：「身近な自然に親しむ」にかなう展開になるかもしれないと思いました。